

人間科学会学術講演会 「子どものころと親の役割」

京都大学名誉教授 山中康裕先生

Yasuhiro Yamanaka's Lecture for the Society of Human Sciences

寺井 弘実 抄録

Summarized by Hiromi Terai

〈講演風景〉



日時：平成21年10月28日(水) 16:10～17:40

会場：金沢星稜大学 本館101講義室

はじめに

皆さんこんにちは。資料には著書が書いてありますが、今までにどんなことをやってきたとか、どんな本を書いたとかは私にとってどうでもいいことです。

さて、一期一会という言葉をご存知ですか。最近の若い人にはそういう言葉はあまり伝わっていないようです。一期一会というのはその会ったときが一番大切なのだという意味です。その会ったときに、今日はいい話が聞けた、いい時間が持てたということです。私がどんなことをやってきたかということとはあんまり関係ないことです。

昨日は、九頭竜川の源流である石徹白川に行ってきました。1000メートル上って向こうが郡上市白鳥になる。丁度、長良川と九頭竜川の源流のところを6キロほど歩いてきました。それが昨日で、今日はサンダーバードに乗って金沢にお邪魔しました。金沢は私の故郷だった街です。私は京大に赴任したわけなのですが、そこに赴任する前に金沢大学に来るはずになっていたわけですが、ある都合でやめることになりました。

今日は寺井先生から子どもの心と大人の役割について話をしてくれという話だった。その理由は30年ほど前に『少年期の心』(中公新書)を書きました。そのときの本がベストセラーになって、いまだに増刷を重ねています。これが

私が子どもの専門家と思い間違われる理由です。子どもだけをやっているわけではないです。人間の専門家です。専門は少年も中年も老年も全部をやっているわけですが、それがその本のおかげで子どもの専門と思われるようになった。そのために子どものことでいろいろなところで話してきたし、会ってきた。子どものことでは一家言あります。そこに今日は大人の役割ということも話すことになりました。

少年犯罪・不登校と子どもの心

私が最近考えていることは少年犯罪です。それはあなたが聞きたくないというおぞましい話です。その聞きたくないということは、人間の恥部、人間の大事な部分です。子どもたちの心がまだ素朴だった頃がある。その頃は少年犯罪といっても窃盗・放火などマイナーな犯罪がほとんどでした。非社会的な犯罪が、反社会的になった。非社会的な頃は不登校とかが出てきた時期です。『少年期の心』が出た頃は、この治療法は画期的なことだった。そこで学校へ行かない子どもたちというのが私のテーマになった。その頃は学校へ行かない子どもたちを何とか学校へ行かせる方法論を考えている先生たちがほとんどだった。それは否定しません。しかし学校へ行かない子どもたちは学校へ行っ

ておられんわけです。その行っておられない理由を一つか二つ挙げますと、私が関わった男の子なんかは、お母さんが自殺されたわけです。自殺された翌日から学校へ行かない。皆は元気付けて学校へ行かそうとしたが、その尾を引きずって学校へ行かないのだと皆は思うわけです。実は自殺の理由の一つでもあるのですが、旦那さんが一つも働こうとはしない。そして世の中に希望を持っていない、子どもを育てているという責任感がない。親の責任とも絡んでくるのですが、それでお父さんが後追い自殺をするのではないかと子どもは見張っていた。だから学校なんか行っていられなかったわけです。それが真相です。それはセンセーショナルなケースで、もちろんそれだけが学校恐怖症の全てではないわけです。

学校恐怖症とか登校拒否というのは複数の原因が錯綜している。いろんな原因がある。そんな子ども達と会って気づいたことだけれど、子どもたちは彼らなりに考えているけれど、子どもが大人になっていく一番大事な時期に本当の意味で人間になっていないものがある。その人間になっていない部分に途中で気がつくのです。それで学校へ行けなくなる。学校というところは人間にするところではなくなった。学校というところは本当は人間にするところなんです。いつの間にか知識だけを押し付けるところになってしまった。今は大学もそうってしまった。この星稜大学も発足し2年前に人間学部ができたことはご同慶に耐えないのですが、大学も変質した。本当に人間に成っていくためにはどうしたらいいかを学んでいない、そんな子どもたちが学校恐怖症という形を取って現れたということです。その子どもたちが人間になるためにはどうしたらいいかということステップを踏んで学んでいない、私の言葉で言えば乗り越えるとか卒業するとかおさらいするということになる。学校へ行ったほうがいいと思った子は学校へ戻るし、学校なんか戻っても仕方ないと思った子は別の道に進む。私の事例では例えば春慶塗とか九谷焼をやるということで弟子入りして入ってしまった。そこで10年修行して本物の職人になる。本物の人間になる。だから私の場合は学校へ戻すということが目的ではない。関わった不登校は300人を超えるが、本当の意味で原籍校に戻ったのは1/3。後の2/3は原籍校に戻っていない、その半分は原籍校に戻らなかったけれど、他の学校とかへ行った。残りの子どもたちは本当の職人になる。例えば農業を継いだ子もいた。いろんな子がいた。そんな子どもたちの方が今はたくましく生きている。そういう現実を見てきた。こんな仕事を40年やっていると、その子どもたちはどうなったかが見えてくる。学校へ戻すだけが目的というのはおかしい。その子たちが学校へ行かないことを私はポジティブに捉えます。学校へ行かないのだから脱落者であるとはみない。当時は多

くは学校へ行かないことをネガティブにしか捉えませんでした。そういう単純な一次方程式でしか考えられてこなかった。学校へ行かすことだけが目的ではないのです。

鎖国というアイデア

私にそのときに浮かんだアイデアは江戸時代の鎖国。最近江戸学がすごい勢いで進んできた。鎖国は明治維新以降100年にわたって誤解され続けてきた。日本が鎖国をしたおかげで、どれだけ諸外国から遅れをとったか、学問的にも文化的にも遅れをとったかということばかりが言われてきた。ところがここ20年くらいは、いや鎖国にも意味があると云われだした。特に江戸幕府が発展し、独特のものを生んだ。江戸文化はすごいものだった。元禄時代を取り上げると、今から250年位前です。100万都市は世界で江戸だけです。パリは60万、ロンドンも70万くらいしかなかった。そういう時期に江戸は100万いたわけです。その江戸で独特の文化、俳諧、歌舞伎、茶の湯、華道ですね。今はお金さえ積めばできるといわれますけれど…。なんでもシステム化して、卒業すると、そういうところから何でも形骸化するわけです。本質はお茶の心だけでも、花の心だけでも極めたら人間になれるわけです。そっちの方がいいです。鎖国というのは日本人が日本らしくあろうとした、日本人のアイデンティティの原点だと理解した、それが私の発想の原点です。鎖国というのは国を閉ざす、しかし全部閉ざすのではなく、一個だけを開ける。全部閉じたのでは何もわからなくなる。全部が遅れるわけです。自己完結型では何もわからなくなる。一箇所だけ窓を開けて、そこだけを開けておけば外のものが見えてくる、全部が見えてくるということにしたわけです。

私は子どもたちを江戸とパラレルに見た。子どもたちは学校へ行かない、他の子どもたちとコミュニケーションをとらない。一個だけ開いている窓を見つけたら、その子とコミュニケーションをとることが治療です。病院で仕事しているとそういう子たちが40人くらいざっと入ってくるわけです。看護婦さんなんか「先生、診察はいつなさるのですか」と聞いてくる。子どもはそれぞれどうだこうだといろんなことを教えてくれる。看護婦は「先生は趣味ばかりやって困る」と言われる。「診察をしてください」というわけです。僕は「これが診察なんですけど…」というと「そんな診察観たこともない」といわれるわけです。薬を使わないので、病院は儲からない。それで12年やって首になるわけです。

酒鬼薔薇事件から見えてくるもの

私はこれを窓といいました。最近はこの窓がなかなか見えない。「なんもおもしろい」ということが言われるようになった。この「おもしろい」というのは窓が全方向に開きすぎて何もおもしろいのか、全部閉まっていておもしろいのかということです。開いていないか繋がっていないかどうかです。何が起きているのだろうというのが私の問題意識です。私の考えでは1997年。もう12年前ですが、酒鬼薔薇事件があった。あの頃がターニングポイントだったと思う。神戸の中流家庭の14歳の少年が11歳の子どもを殺害した事件です。このパワーポイントを見てわかるとおりデーターがあって、裏づけがあって私は考えを述べている。少年事件は増えた、増えたといわれるが少しも増えていない。増えたわけではなく、新聞が書き立てると3倍くらいの量で伝わるのです。ちょっと増減があるだけです。質が変わったのです。

これを見るために典型例を出して比較してみます。昭和35年に17歳の少年が浅沼委員長を暗殺した事件がありました。演説をしている最中に、少年が短刀を持って後ろから刺殺するという事件です。犯人は右翼の少年です。父親は自衛隊の一等陸佐です。少年は高校を中退して、大日本愛国党に入った人で、東京少年鑑別所で自殺しました。天皇陛下万歳といって死んでいく。これは典型的な思想犯ですね。思想犯というのはそれだけでは必ずしも悪だというわけではありません。当時のソ連や中国では自由を言っただけで捕まりました。思想犯というのはその体制の反対を叫ぶ人たちですから。だからイデオロギー的なことが絡むわけですね。浅沼事件と比較するのはとんでもないことですが、比較してみると1997年というのは平成9年。少年は酒鬼薔薇聖斗と名乗って神戸新聞に投書しました。小学5年の土師淳君という少年を絞殺して、首を切り落とし小学校の門に据えた。それが毎日、位置が違った。彼が変えたのです。父親は市内に勤務する技術系の会社員。いわゆる中流階級。ただ自分の息子はこんなことを考え、こんなことをやっているということは両親とも全く知らなかった。その事件のときに校門に置かれた首の口に挟まれていた手紙がこれです。14歳の少年の書いた文章です。「さあ、ゲームの始まりです。僕は殺しが愉快でたまらない。警察官諸君、僕を捕まえてみたまえ。…(略)…」全部新聞を切り抜いて作った文章です。この文章を読んで、誰も少年だとは思わない。たぶん中年ではないかと思ったわけです。これを読んで誰も中学2年とは思わない。読んでいくとニーチェ、ダンテからの引用がある。ダンテの「神曲」ですよ。それを彼は全部読んで、的確に引用している。「…愉快に付け、楽しいに付け自分がちっぽけな存在であることに気

づいた。人生において最大の敵は自分自身なのである」すごいでしょう。哲学者が書いたような文章。これを彼が書いた。だから送りつけられた新聞社は犯人は中年の、それも相当心に偏りのある人に違いないと思った。これが14歳の少年の書いた文章と思えるだろうかということです。ニーチェの「ツァラストラかく語りき」などはゾロアスター教のことを書いた本です。ニーチェは実存哲学の総帥とされる人。そのニーチェをきちんと読んで、的確に引用している。何故これを取り上げたかという、センセーショナルな事件を取り上げて皆さんに見させようとしたわけではないです。私は自分の意見はきちんといいます。2名の精神科医による鑑定書がでた。何故彼がこのような事件に傾斜して行ったかは、彼が11歳のときに祖母が亡くなったからです。彼の身の回りのことをきちんとやっていたのは祖母だった。祖母が脳溢血で11歳のときに急に亡くなった。彼はそれまで祖母に面倒を見てもらっていたのが、誰も面倒を見てくれなくなった。11歳ですから親ももういい年齢なので、手放してもいいと思ったのでしょう。ほとんど誰も彼が何をしているか興味を持たなくなった。それで彼は自分から祖母を引き離れたものは誰なのかという哲学的な問いを始めた。私は殺人ということをどういう理由をつけても認めるものではない。それは方法論的にも目的論的にも間違っている。その意見を私は中央公論11月号に書いた。犯行の意味は人間死んだらどうなるのかとか、すべて実存的哲学的問いです。そして人とはいったい何なのか、これは宗教的哲学的問いです。裁判官や検察官は聞くわけです。君は2回にわたって、被害少年の血を飲んだというが、それは本当かという問いです。彼は本当ですと応えている。それはどうしてかと当然聞き返すわけです。それは僕はずっと心が穢れていると思っていただけだと。被害少年は心が清らかで、僕のような心が穢れているわけではない。彼の血を飲んだら、僕の穢れは少しは穢れがなくなるのではないかと思ったからだと応えています。これはきわめて宗教的な問いであり、宗教的な答えです。また校門に置かれた首が動いている、あれを動かしたのは誰かという問いです。僕ですと答えるわけです。だって僕の作品だからですと応えています。もちろんその考え方とか方法論は全部正しいとは思っていませんが、彼はきわめて正確にものを言っています。これだけ正確に答えていることに驚いた。哲学的宗教論的なことを考えているからです。人間死んだらどうなるのか、死んだらどこへ行くのかということです。死とは何か、穢れとは何か、この答えを満足するものは何か。それは人間の普遍的無意識のなかにあるもの。普遍的層で起こっているというのが私の考えです。パーソナルな部分ではない。それはこの子だけを罰し、抹殺すれば事件は無くなるというものではない。普遍的無意識にお

きていることですから、皆さん全部にも起きている氷山の一角に過ぎない。

もう一つだけ言っておきましょうか。佐世保の殺人事件です。2004年です。佐世保の小学校で6年生の女の子二人。被害者は毎日新聞に勤めているお父さんの娘さんだった。彼女が同級生の女の子にカッターナイフで頸動脈を切断された事件です。これなんかも丁度12時にお昼の時間になって、皆はクラスで先生と一緒にになって給食を食べている。ところが二人がいないことに先生が気がついた。どうしたものかと思っていると向こうから加害者の女の子が血のついたナイフを持って戻ってきた。彼女が全身血だらけですから、この子が犯罪被害者だと先生は当然思ったわけです。どうした！と先生は聞いたわけですけど、子どもはこっちこっちというのでついて行ってみると、そこは3階の使われない倉庫になっている部屋だった。そこに女の子が倒れていた。先生はびっくりして救急車を呼ぶわけです。警察と消防士の6人がその部屋に駆け込んだのですが、駆け込んだ5人がPTSDになった。それくらい凄惨な現場だった。顔は足でけられて、くちゃくちゃになっていた。血が噴出して、部屋一面が血の海だった。飛び込んだ警察官も消防士もそういうことの専門家なのに6人のうち5人がPTSDになってしまうほどの現場だったようです。頸動脈を切って、加害者生徒には血が飛び散って全身に浴びるわけです。加害者は被害生徒の顔に手を持っていき、息をしていないことを確認し、脈がないことを確認してから先生に報告に来ている。その間10分、血が流れているのを見ているわけです。そういう事件です。非常におぞましい事件です。これは二人が背中に乗りっこして遊ぶあそびをしていて、けんかになり、あんたぶりっ子や死ねということで事件に至った。このためにカッターナイフを三日前から用意して持って犯行に及んだ。これなんかも極めて冷静に計画的に及んだ犯行です。小学校6年生のやることとは思えない。さっきの話は中学2年生の犯行です。以前はこんなことはなかった。

情報革命のもたらすもの

私は情報革命という言葉を使っています。皆さんが生まれた頃にはすでにTVがあった。ラジオの放送が始まったのは大正6年、今から丁度83年前です。TVにいたっては昭和26年。私は小学校3年でした。絵が出るラジオがあるらしいという話があった頃です。当時TV1台が20万円、僕らは弁当をもってTVのある家へ見に行った。その頃から現在までに情報機器の進歩は格段の歩みを見せた。それとともに人間の意識に大きな影響を与えた。第一次情報革命がラジオ、第二次情報革命がTVで、第三次情報革命がパ

ソコンと携帯電話です。この間に情報機器の個人化が進んだ。パソコンが出てきたのは1995年。情報革命はパソコン、携帯電話です。最初のコンピューターは東大と阪大という大きな二つの大学が持ったとてつもない大きなものだった。それが今や持っていない人がいないくらいの普及率です。

繋がりの切れた事件の増加

バスジャック事件を起こした人が17歳。つい3年前に宇治で大学院生が小学校5年生を殺した事件もあった。これらは皆同じ年に生まれた人たちです。95年以前の事件には原因と結果に因果関係のあることが多かった。怨恨とか思想性、あいつ気にいらんとか関係が読めるものが多かった。単純な一次方程式のような関係式があった。秋葉原事件では走って行って無差別に人を殺す。パチンコ屋の事件のようになんとなくむしゃくしゃしていたからガソリンに火をつけて撒いたということがおきた。全く関係のない人たちが対象になった。全然関係が無いのです。関係つけなど一切無し。無関係の関係性。関係性が全くズレてしまった事件が勃発しました。これはパソコンの個人化と同じで世界とつながっていないのです。

自然との繋がりを求めて

ここからが結論。子ども達が切れたという言葉をよく使うようになった。何が切れたのかというのが私の問いであるわけです。自然との極端な減少。ここで言う自然とはNatureのこと。それと対人接触。人と人が触れ合うこと。携帯電話で話を済ませているがここには一見相手と繋がっているように見えるだけで道具とのつながりであって、相手とのつながりが無い。相手の状況に関係なく、勝手に侵入するものです。心の接触が無い。対人接触が無い。これが大幅に減って、機械との接触が大幅に増えました。パソコンを一日8時間やっている子がいる。携帯ゲームの中でいろんな音を出してそこで楽しみ、そこで多くのバランスをとっている人もいるのでないか。そこで多くの人は一時的なバランスを保って、次の新しい刺激を求めていくだけ。そういう世の中になってしまったのだというふうには見えています。1995年を境にして、犯罪の性質が変わったと私は見えています。これは情報革命で携帯電話の普及で心のあり方が大幅に変わったことと関係があるのでないかと思っています。自然との関係が切れている。

身体の中を流れている血液はペーハーは太古の海と一緒にです。人間もアメーバーも海から生まれてきた。だからそうした海の性質と一緒にです。身体の中を流れている血液は

内なる自然なのです。そのうちなる自然であることすら忘れていて。養老孟司さんは脳だけがこころを支配しているというが、脳なんてコンピューターです。脳が喋っているかもしれないが心がない。コンピューターは自分で自分のボタンを押すことはできない。人間が生まれて10万年、人間の心がどこにあるかを本当の意味で明らかにした人はいません。17世紀ウィリアム・ハーベという人が心臓を解剖した。すると心臓はポンプだった。昔から心臓は心の臓と書いたのです。心があると思われていた。心臓には二心房、二心室。だから心臓には心なんか無いというのが結論だった。そこで私は何故心臓に心があると昔の人は考えたのかと理由を考えたのです。私は全部の細包一つ一つに心があると考えている。人間だけが脳皮質を中心に発達して、大脳辺縁系ができた。要するに脳はそういうことを的確にするコンピューターなのであって、ボタンを押すのは心です。人はそれぞれ皆違うのです、違っていい。何もかも均質化してしまってものが見えなくなった。運動会でもかけっこがなくなった。皆個性がなくなった。学校の先生も個性がなくなった。人間なんて全部違う。違っていいのです。そこが一番大事なところ。

もう少し話しておきます。最近の子どもはすぐにリストカットとか行動化する。アクティングアウトです。拒食症とか身体のほうで表現してしまう。神経症という症状をとらなくなった。何もしない、何も面白くないということに陥ってしまう。乖離症候群が起きてくる。乖離とは自分がしたという認識がない。他者への配慮がない、自己チューで無責任。敬語は使いません。

カウンセラーを目指して

人は自然とつながらなくなった。そこで私は自然をテーマにすることを考え、カウンセラー（川とカウンセラーの造語）になった。川との繋がりを調べようとしたわけです。京大を退官した2005年から私はカウンセラーになりました。岩波の『科学』という雑誌にそのことを16回連載しています。なぜ川なのか。コンピューターや携帯など人工的なものばかりに接して、自然とのふれ合わなくなったからです。自然とのふれあい、内なる自然、つまり身体との接触が切れているからです。その切れているのを繋げるのが私のコンセプトです。地表で一番高いところはエベレスト、日本では富士山、海は海拔ゼロ。海と山の落差8000

メートル、または4000メートルの落差を埋めるのは川です。私は福井県の九頭竜川でやまめの稚魚を幼稚園の子どもたちと流した。その一部は河口に行き7年経って戻ってきて、桜マスになる。初めは事故があったらどうしようと先生は怖がった。でも責任は私が取るからといってやった。但し保護者には自分の子どもをちゃんと見ていることを条件に始めた。子どもたちは放流したときに稚魚に向かって大きな声で「帰って来いよ、帰って来いよ」と叫んだのです。それで目がきらきらと光っている。終わってから一緒に絵を描いた。生き生きとした絵を描いた。幼稚園の先生は自分の小さい頃を思い出して感激した。親が責任を持って子どもを見ながら、川と接触するのはあります。放流した後の子どもたちの生き生きとした表情を見てください。今99歳になる昔校長先生をやっておられたお祖母ちゃんですが、川の上流に木を植えてこられた方です。川を守るために木を植えるということは大事なことです。木は水を保水する。木がないと水は海へ一気に流れてしまうのです。川の周りをコンクリートで埋めてしまっていますが、本当は木で守ることが大事です。堤防は木を井桁に組んで埋めると周りに微生物が生まれ、それにつられていろいろな生物が集まってくる。このように生態系を守る方法論がある。韓国では今の大統領が市長の時代に高速道路のために埋めてしまったソウルの川を元に戻した人です。韓国の心を取り戻した人というので大統領に成った人です。

親の役割・大人の役割

私が言いたいのは大人がちゃんとしているか、子どもを見ているか、子どもの育ちにどれだけ関与しているか、子どもが何をしているのかに気づいているのかどうか、パソコンで何をしているのかを知っているのか、自分自身の将来に世の中に希望を持っているかということです。自分がどうしたいか、自分が何をしたいか、自分がこの国をどうしたいかです。大人の役割は子どもが自分はこれでいいのだと思える基盤を与えることが大事です。母性で守っているかということです。規範を教えているか、子どもに何をしたいのかをきちんと伝えているかどうかですね。遊びは人間にとって大事です。子どもに希望を与えられるかどうか、これが親の役割なのです。自分自身が何をしたいのかを心に考えさせることが大事です。これで終わります。ご清聴ありがとうございました。

